



★
グリム童話集

ハウノ童話集

陳商
石の心臓
著

世界
少年少女
文学全集

グリム童話集

ハウフ童話集

隊 商
石の心臓

相良守峰 角 信雄 高橋健二
訳

創元社

14

世界
少年少女
文学全集
14

ドイツ編 1

第十九回
配本

定価 380 円

万一落丁乱丁がありましたら
お取り替え致します

昭和 29 年 4 月 30 日 発 行

訳者代表 ^{さが}相 ^ら良 ^{もり}守 ^お峰

発行者 小 林 茂
東京都中央区日本橋小舟町 2ノ4

印刷者 中 内 佐 光
東京都千代田区飯田町 1ノ23

発行所 株式会社 創 元 社

東京都中央区日本橋小舟町 2ノ4
(大阪市北区鶴上町45)

電話 (茅場町) 1734, 2064, 4083
振替・東京 1565. 大阪 57099

印刷所	曉印刷株式会社
製本所	鈴木製本所
本文用紙	本州製紙株式会社特選
本文用紙納入	市瀬洋紙店
クロス	日本クロス株式会社特製

目
次



第 14 卷
少年少女
ドイツ文学全集
1





グリム童話集

相良守峰訳 7

名人四人きょうだい

9

かしこい百姓娘

16

おおかみと七匹の子やぎ

21

寿命

25

白雪姫

28

大入道と仕立屋

41

金の鳥

44

ブレーメンの楽隊

55

ひらめ

60





いのちの水

ふたりの旅職人

星のお金

ヘンゼルとグレーテル

三人きょうだい

泉のそばのがちょう番の女

いばら姫

森のおばあさん

シュワーベン七人男

親指小僧

くもりのないお日さまは、かくしごとを明かるみへだす

61

70

85

87

98

101

116

121

125

130

138





ハウフ童話集

隊

商

角

信

雄

175

幽霊船の話

197

こうのとりになった王さまの話

181

貧乏人と金持

141

こわいことをならうために旅をする男

147

悪魔とおばあさん

162

十二人きょうだい

167





解か説せつ

訳

者
359

第だ二部ぶ

334

第だ一部ぶ

305

石いしの心臓しんざう

高橋健二訳
303

にせ王子物語おうじものがたり

276

ちびのムクさんの話

254

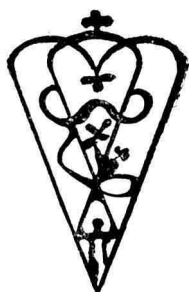
ファトメのすくいだし

232

切られた手の話

211





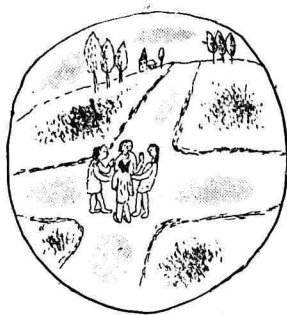
	さ し 絵	そ う て い
西	高	初
田	橋	山
勝	忠	滋
	弥	

グリム童話集

相良守峰訳

さ
し
絵
高
橋
忠
弥

名人四人きょうだい



ある貧乏な男に、四人のむす子がありました。

むす子たちが大きくなり、ますます、貧乏な男は、子どもたちに向かって言いました。

「さあ、子どもたち、おまえたちも、そろそろ世間に出て行かなければならぬ。……おまえたちにやれるようなものは、わしには、何ひとつない。これから出かけて、よその国に行き、何かひとつしごとをおぼえなさい。そして、せいっぱい世の中をわたってみるのだ。」

そこで四人のきょうだいは、杖を持ち、父親にわかれをつげると、そろって町の門を出て行きました。

しばらく行きますと、四つ辻に出ました。道は、ここから、四つの、それぞれちがった国に通じているのです。

そこで、いちばん上の兄が言いました。

「ここで、おれたちは、わかれなければならない。だが、四年後のきょう、またここにおちあうことにしよう。それまで、めいめい運だめしをするのだ。」

こうして、ひとりひとり、べつべつの道を進んで行きました。

やがて、いちばん上の兄は、ひとりの男に会いました。男は、どこへ行くのか、何をやるつもりなのか、とたずねました。

「何かしごとをおぼえるつもりだ。」

いちばん上の兄は、答えました。

すると、男が言いました。

「わしといっしょにきて、どろぼうにおなり。」

「とんでもない。」

いちばん上の兄は言いました。

「どろぼうなんて、今どき正しい人のすることではない。さいごには、首つり台にぶらさげられるのがおちだ。」

すると、男が言いました。

「なあんだ、首つり台なら、こわがるにはおよばないさ。わしはただ、ふつうの人では手にはいらぬものを、だれにもしっぽをつかまねずに取ってくることを、教えようというだけなんだ。」

こうして、いちばん上の兄は説きふせられ、この男について、腕ききのどろぼうになりました。そのたくみなことといったら、一度ねらったらさいご、どんなものでも手に入れました。

二番めの弟も、ひとりの男にいました。この男もやはり、世間に出て何をならうつもりか、と同じようなことをききました。

「まだわからない。」

二番めの弟は答えました。

「じゃあ、わしといっしょにきて、千里眼にならなさい。これほどすばらしいものはないよ。何ひとつ、見えないものはないのだから。」

二番めの弟は、それにしたがって、それはそれは達者な千里眼になりました。

そして、いよいよ修業もおわり、ふたたび旅に出るときになって、先生は一つの遠めがねをわたして言いました。「これさえあれば、天上天下のできごと、何ひとつおまえに見えぬものはない。」

三番めの弟は、ある獵師のところに弟子入りました。

獵と名のつくものは、何から何まで、たいへん親切に教えてもらいましたので、腕っこきの獵師となりました。

わかれるとき、先生は、一ちょうの鉄砲をおくって、言いました。

「これでねらったら、それるということはない。かならずあたるぜ。」

いちばん下の弟も、やっぱりひとりの男にいました。

男は弟に話しかけて、何をやるつもりか、ときいてから、こう言いました。

「おまえさん、仕立屋になる気はないかい。」

「そいつは、どうかなあ。朝から晩までかがみこんで、針であちこちつつきまわしたり、火のしをかけたりののは、あんまりしっくりしないなあ。」

すると、男は言いました。

「何を言ってるのさ。おまえさんの言うのとは、すこしちがうんだよ。わしの教えるのは、ぜんぜんちがったぬいからだ。品はいいし、捨てたもんじゃない。見ようによって、なかなかrippなものだ。」

こうして、いちばん下の弟も説きふせられ、この男について行って、そのわざを、とことんまでならいました。

いよいよわかれるとき、先生は針を一本くれて、言いました。

「これを使えば、どんなものでもぬいあわせられる。たまごみたいにやわらかなものでも、はがねのようにかたいものでも、かまわない。おまけに、ぬったものは、まったく一つものになって、ぬいめひとつ残りはしないんだ。」

約束の四年がたちました。

四人のきょうだいは、同じ時刻に、あの四つ辻でおちあい、たがいにだきあってキスをし、それからおとうさんのうちに帰りました。

父親は、心から満足して言いました。

「さてさて、風のやつ、またおまえたちをここまで吹きもどしたな。」

四人のきょうだいは、自分たちの出あったできごとを物語り、めいめい、自分のわざを学んできたことをつけました。

さて、この人たちのすわっていたのは、ちょうど、うちの前の大きな木の下でした。

そこで、父親は言いました。

「さて、ひとつ試験をして、おまえたちにどれほどのことができるか見てみよう。」

こう言って、父親は大木を見あげながら、二番めのむす子に言いました。

「あのとっぺんの枝と枝のあいだに、うそという鳥の巣がある。あの中に、いくつたまごがあるか言ってごらん。」

千里眼は、れいの遠めがねを取りだして、見あげて言いました。

「五つです。」

すると、父親は、いちばん上の兄に言いました。

「あのだまごを取っておいで、たまごをだいている親鳥には、気づかれぬように。」

どろぼうの名人は、さっそく木にのぼると、なんにも知

らずに、おとなしくすわっている親鳥おやどりの腹はらの下から、五つのたまごをぬき取って、父親のところに持ってきました。

父親は、たまごを受け取りますと、テーブルの四すみに一つずつと、五つめのたまごをそのまんなかにおいて、三番めの、猟師りやうしのむす子に言いました。

「一発いっぱつで、この五つのたまごをみんな、まっ二つにしてみせてくれ。」

猟師は鉄砲てつぱうをかまえると、父親ののぞみどおり五つのたまごをうちぬいてみせました。それもただの一発です。

このむす子はきつと、テーブルのすみずみをぐるっとまわってあたるような火薬かやくを持っていたにちがいありません。

「さあ、こんどは、おまえの番だ。」

父親は、四番めのむす子に言いました。

「このたまごを、もとおりにぬいあわせてごらん。中のひなもいっしょだ。それも、うったぎすが一つも残のこらんようにな。」

仕立屋したてやは、針はりを取りだし、父親ののぞみどおりに、ぬってみせました。

全部ぜんぶがおわりますと、どろぼうの兄あには、また、たまごを

持って木にのぼり、巢すの親鳥にはすこしも気づかれぬように、その腹の下にたまごをおいてこなければなりませんした。

さて、親鳥がすっかりたまごをかえし、二三日たつと、ひなたちがはいだしました。仕立屋のぬいあわせた首くびのまわりには、赤いすが一本ついているだけでした。

年とつた父親は、むす子たちに言いました。

「なるほどな。なんとほめていいかわからない。おまえたちは、時ときを十分利用して、りっぱなわざをおぼえてきてくれた。だれがいちばんすぐれているか、わしにはなんとも言えない。近いうち、おまえたちのわざをためすようなおりでもあれば、それが自然しぜんとわかるだろう。」

その後、まもなく、この国くにに大さわぎが起りました。王きうさまのお姫ひめさまが竜りゆうにさらわれてしまったのです。

王さまは、夜となく屋いほとなく、お姫さまのことを心配しんぱいされ、だれでもよい、姫をつれもどした者ものには、姫をお嫁よめにとらせると、おふれになりました。

四人のきょうだいは、相談さうだんしました。

「これこそ、おれたちのお手並てなみを見せるいい機会きかいというも



のだ。」

そこで、四人そろって、お姫さまをすくいにいくことになりました。

「姫のいどころは、すぐにみつかる。」

千里眼は、こう言って、れの遠めがねをのぞき、

「わかった。お姫さまは、ここからずっとはなれた海の中の岩の上にいる。そばには竜がいて、番をしている。」と言いました。

千里眼は、王さまのところへ行って、自分と、自分のきょうだいのために、舟を一そう貸していただきたい、と言いました。そして、きょうだい四人、海をわたって、その岩のあるところへ行きました。

姫はそこにいたのですが、竜がそのひざに乗って、ねむっています。

獵師は申しました。

「うつわけにはいかない。美しい姫もいっしょにころすといけないから。」

「では、おれが運をためしてみよう。」

どろぼうの兄は、こう言くと、こっそり、しので行っ

て、竜の下からお姫さまをぬすみました。

こっそりと、目にもとまらぬ腕まえに、怪物は何ひとつ気づかず、ぐうぐうとねむりつつけています。

四人は喜び勇んで、大いそぎで姫を舟に乘せ、沖へ向けてこぎだしました。

竜は目をさますと、姫が見あたりませんので、かんかんになって四人のあとを追いかけて、鼻息もあらく、宙をとんできました。

ちょうど舟のま上にきた竜が、今にもまいおりようとしたそのとき、獵師は銃をかまえ、竜の心臓めがけて、そのまんなかにうちこみました。

怪物は、息がたえて、落ちました。しかし、あんまり大きく、あんまりいきおいが猛烈だったために、落ちたとたん、舟はこっぱみじんにくだけてしまいました。

それでも、お姫さまや四人のきょうだい、運よく、板ぎれを二三まいつかまえ、広い海にただよいました。そこで、またまたこまったことになったわけです。

しかし、仕立屋が、すかさず、れいのふしぎな針を取りだし、大いそぎで板ぎれをあらぬいにぬいあわせ、さらに

その上に乗った舟の破片をすっかりかき集めました。それから、これもひじょうにうまくぬいあわせましたので、舟は、もとどおり走れるようになりました。

こうして、きょうだいは、ぶじに帰ることができたのです。

王さまは、お姫さまをごらんになると、それはそれ、たいそうな喜びようでした。そして、四人のきょうだいに言いました。

「おまえたちのうち、だれかひとりに、姫を妃としてとらせるが、だれにするかは、おまえたちどうしできめるがよい。」

そこで、めいめい自分の言いぶんを主張しましたので、きょうだいのあいだには、はげしいあらそいが起りました。

千里眼の弟の言いぶんは、つぎのようでした。

「おれが姫をみつけなかったら、みんなにどれほどのわががあらうと、役にはたたなかつたらう。だから、姫はおれのものだ。」

どろぼうの兄の言いぶんはこうです。